藤枝静男著作集

第四巻

藤枝静男著作集

第四巻

講談社

藤枝静男著作集　第四巻

昭和五十二年一月十六日第一刷発行
昭和五十二年四月十八日第二刷発行
著者／藤枝静男
発行者／野間省一
発行所／株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話／東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所／信毎書籍印刷株式会社
製本所／大製株式会社

©藤枝静男　昭和五十二年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。Printed in Japan

定価は箱に表示してあります。（文1）

¥2,500

藤枝静男著作集　第四巻

目　次

〈小説〉

イペリット眼　13
犬の血　64
掌中果――ある黄檗僧の話　111
異物　121
明かるい場所　130
うじ虫　178
武井衛生二等兵の証言　192
異床同夢　251

〈書評〉

遁走――安岡章太郎　265

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長い谷間——椎名麟三 266
甲州子守唄——深沢七郎 268
青梅雨その他——永井龍男 270
懐胎——耕治人 273
島尾敏雄作品集第五巻 275
一條の光——耕治人 277
新・東海道五十三次——武田泰淳 280
灰皿抄——永井龍男
／冬眠居閑談——尾崎一雄 282
発掘——伊藤整 285
虚実——中村光夫 288
遠山の雪——網野菊 291
一人の男上・下——武者小路実篤 293

原民喜のこと　295
瑠璃庵雑記——谷口健　298
小説渡辺崋山——杉浦明平　299
崋山探索——杉浦明平　303
繭となった女——小林美代子　306
雀の卵その他——永井龍男　308
父・広津和郎——広津桃子　310
木の文化——小原二郎　312
一族再会〈第一部〉——江藤淳　313
雑談衣食住——永井龍男　319
田螺の唄——石塚友二　320
批評家の気儘な散歩——江藤淳　322
雪晴れ(志賀直哉先生の思い出)——網野菊　325

俳人仲間——瀧井孝作 327
田園組曲——杉浦明平 331
木下杢太郎——杉山二郎 333
中野重治「わが読書案内」について 334
志賀さんの生活など——瀧井孝作 335
冬の鷹——吉村昭 336
無縁の生活——阿部昭 339
〈文芸時評〉 343
〈随筆〉
利己主義の小説 387
私小説家の不平 389
作品の背景 392
勝手な読書 394

今昔物語集 396
わたくしの敬愛する文章 397
ある姿勢 400
学者まかせ 404
実作者と鑑賞家 407
二流品を好く理由 410
読書と創作――わが町・わが本 412
追憶 416
「眼は心の窓か」 421
昔の道 428
詔勅と占領との間 432
戦後ということ 433

解説　445
初出一覧　436

装幀　辻村益朗
口絵写真撮影　大野辰男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

藤枝静男著作集　第四巻

小説

イペリット眼

一

昭和十九年十月中旬のある雨の降る午後のことであった。A海軍火薬廠附属病院の眼科主任・島村章は、技研の原口大尉に電話口へ呼び出された。

「うちの宮田二等工員ですな。あれは眼科の方で要休となっていますが、実は詐病でした。本人が自白したからお知らせします」

相手はつけつけした調子で云うなり、返事を待たずガチャリと電話を切ってしまった。章は自分の職業が不当に侮辱された、と云うよりは出会い頭にいきなり平手打ちをくわされたような屈辱で青くなり、妙にもじもじした様子で電話口を離れた。

宮田という工員は十八九歳の少年で、病気は角膜表層炎であったが、流涙と羞明が意想外に劇しく、その上どうしたわけか空咳嗽を頻りにする、声が聞き苦しく嗄れている、変に赤黒いうかされたような顔色をしている、この状態で作業は無理だろうと考えたので、彼は二三日休むよう診断書を与えたのであった。

正当な診断書が無視されるとか、工員が青年将校のビンタ一つで自白するとかいうことは、何も章が青くなるほど例外的な事件ではない。それは権力に無縁な医員全部がしばしば経験し、よく承知していることであった。だがやはり、その都度彼等は一日中やり切れない憤懣と恥辱を頭につめて過ごさざるを得ないのであった。

晩になっても雨はやまなかった。当直の冷たい夕食をすますと、彼は副直のX線技師・加藤と畳敷の当直室に寝転んで雑談を始めたが、話題は結局思い切りわるくそこに落ちて行った。

しかし自分の口から話しているうちに、彼は改めてそれがこの病院では日常のことにすぎないことを自覚した。自覚することで一応慰められもした。

「いや実はね」章の紋切型の愚痴話が終ると、待っていたように加藤は隣りの院長室の方へ首を振った。「隣りでも徴用工を詐病で調べているんです。何でも癲癇とか云ってました」

午後の四時頃から始めて二時間余りになるが、自分の食事も部屋にとり寄せて執拗に粘ばっている、大体院長はしつこくて仕事が能率的でない、一体何をそんなに訊くことがあるのだろうと加藤は云った。章は気乗りのしない生返事をしていたが、そんなことから話は自然に一般の詐病の方にそれて行った。

加藤は海軍で満期をとった後、引続きこの病院に勤務してもう十余年になる古兵であったから、こういう軍隊につきものの話題は豊富に持ちあわせていた。勿論その大部分は、巧妙な詐病が彼自身の炯眼によって看破されたという自慢話であったが、その方が聴いていても気が楽だし興味もあったので、章はいつのまにか感嘆しながら合槌をうっていた。

突然、隣室でゴツッという小さな鈍い音がし、続いてどさっと人の倒れる重い音がした。二人は顔を見合せて黙ったが、すぐ加藤は軍人らしい素早い動作で起きあがると部屋を飛びだして行った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com